

日本語学習者との会話における 日本人大学生の意識的配慮

渡部 倫子

(2002年9月30日受理)

Considerations Japanese university students show intentionally in Conversations
with Non-native Speakers of Japanese

Tomoko Watanabe

This paper aims to study what native speakers pay attention to when speaking to non-native speakers in daily casual conversations. The 'native speakers' referred to in this paper are Japanese university students with no experience in teaching or learning Japanese Language as a Second/Foreign Language. In this study, the relation between intentional consideration and evaluation will be studied.

For this purpose, we conduct the following qualitative research. After 10 minutes of free conversation with Japanese Language learners, 30 Japanese students were asked to elaborate on their opinions about the conversation and the Japanese Language spoken by their partners. They were also asked to list the items they paid attention to during the conversation.

As a result, it was found that native speakers showed their concerns in 11 different aspects. Their consideration changed consciously according to the situation and the learners' output. It was obvious that native speakers were especially aware about 'speaking slowly' and 'choosing the right words'. Native speakers also thought that there was necessity for certain considerations in conversations with Japanese Language learners irrespective of their opinions about the learners' output and the conversation. Furthermore, it was determined that intentional consideration is closely related to the features of evaluation as indicated in precedent studies.

Key words: consideration, native speaker, evaluation, learners' language performance

キーワード：意識的配慮，母語話者，評価，学習者の言語運用

1. 問題の所在と目的

日常の会話におけるわれわれの会話行為は、対話者がどのように話し掛けてくるかによって影響をうけている。対話者が日本語学習者（以下、学習者）である場合も同様であり、学習者の言語運用に対する日本語母語話者（以下、母語話者）の認知が、母語話者の言語運用、学習者への印象形成、その後の対人関係などに影響を与えることが考えられる。近年の第二言語教育では、学習者が実際にコミュニケーションを行う相

手である母語話者が、学習者の日本語運用をどのように評価し、何に注目して評価しているかを解明しようとする研究（日本人評価研究）¹⁾が増加している。日本人評価研究の目的は、教師の内省や経験だけに頼らず、母語話者による評価の視点を取り入れて、シラバス、誤用訂正の方法、評価法を改善することである。現在までに、母語話者による評価の全体的な特徴（学習者の言語運用の悪い点よりも良い点に注目する傾向がある。言語規則よりもコミュニケーションの遂行をより重要と考える。）や、評価を変化させる要因（タ

スクの種類, 学習者のレベル), 母語話者が評価の対象とする要因(発音, 文法, 語彙, 流暢さ, 非言語的要素, 語用論的能力, 待遇表現)などが明らかになりつつある(猪狩, 1999; 石崎, 2000; 河野・松崎, 1998; 小池, 1998; 原田, 2001; 深尾, 1996; 柳町 2000)。

しかし, 日本人評価研究は, 教師と学習者による会話のビデオなどを用いて母語話者が第三者として間接的に評価を行っている研究と, 母語話者が会話の当事者として直接評価を行っている研究に分かれており, 後者の研究は非常に少ないという課題がある。学習者が実際にコミュニケーションを行う相手である母語話者の視点を教育活動に取り入れようとするならば, 後者の研究が今後増えていくべきである。石崎(2000)は, 学習者との会話において, 日本語教師が話の道筋を修正し, 細かい誤りの蓄積によるわかりにくさを未然に防いでいる場合があることや, 母語話者が学習者の意図を読み取るために, さまざまな可能性を考慮に入れながら聞こうとし, そのことが負担となって, わかりにくいという印象につながることを指摘している。母語話者は, 学習者の発話が原因で配慮をしなければならず, その配慮をしたことがマイナスの評価につながっている可能性がある。母語話者による評価を解明するためには, 学習者と会話を行った母語話者自身が, 何を考えて話し, どのような評価をするかという心理面を考慮に入れる必要があるといえる。

そこで本研究では, 学習者との接触場面において, 母語話者がどのような評価と意識的配慮²⁾を行っているかを明らかにするための予備調査研究として, 日本人大学生の意識的配慮の全体像を把握することを目的とする。

2. 母語話者の意識的配慮に関する先行研究

日本語学習者と母語話者との接触場面に関する研究として談話分析の研究があり, 母語話者が学習者に対して行う言語面の特徴(談話の特徴や相互交渉の過程)が明らかになりつつある。母語話者が学習者の理解を可能にするために簡略化された言語システムであるフォーリナー・トークを用いていること(坂本・小塚・架谷・児崎・稲葉・原田, 1990)や, 母語話者と学習者の両者が協力して文の長さや複雑さを調整したり, 文を繰り返したりして相互交渉上の調節を行っていること(村上, 1997)が報告されている。

一方, 会話の心理面については, 心理学の分野で母語話者同士の会話に関する研究が行われている。桑原・

西田・浦・樫野(1989)は, 母語話者同士による会話において, 会話の処理過程あるいは会話行為がどのような規則に基づいて行われているかを明らかにし, 6つの会話規則(①情緒指向的表現規則, ②対話者規則, ③発話遂行規則, ④理解指向的表現規則, ⑤発話意図規則, ⑥受容規則)を提出した。

しかし, 桑原らの研究は, 母語話者同士の会話における母語話者の心理面に関するものであり, 学習者との会話における母語話者が同様の会話規則を用いているかは不明である。

この課題を解決するため, 一二三(1995)は, 学習者との接触場面におけるボランティア日本語教師の配慮に対する意識調査を行い, 7つの意識的配慮(①発話内容を対話者に理解させるための言語面・話題面での意識的配慮, ②対話者の発話を鼓舞する態度で, 対話者を理解しようとする聞き手としての誠意を示すと同時に, 会話を積極的に進めるために必要な意識的配慮, ③会話の場の雰囲気や和らげ, 対話者が会話に参加しやすくなることを目的とする意識的配慮, ④自分と相手との関係を理性的に統制し, 感情を抑制しながら会話を維持することを目的とする意識的配慮, ⑤自分の意思や感想を率直に表現し, 対話者に自分をより深く理解させることを目的とする意識的配慮, ⑥相手との意見の相違などによる対立を避け, 会話を穏便に遂行することを目的とする意識的配慮, ⑦多少の理解できない点などには寛容に対処することで, 会話の無用な中断を回避し, 会話が継続することを目的とする意識的配慮)を明らかにした。

一二三(1995)は, 以上の結果と桑原ら(1989)の研究の結果を比較し, 会話の相手が母語話者の場合と学習者の場合では, 行われる或いは認識される意識的配慮が異なっていることを示している。

また, 一二三(1999)は, 実際に学習者と会話したボランティア日本語教師を被調査者とした量的調査を行っている。その目的は, 「学習者の発話」, 「学習者への認知(学習者の知識量, 学習者の日本語レベル, 主導的役割の必要性など)」, 「ボランティア教師の発話」の関連と, 「学習者の発話」, 「ボランティア教師の意識的配慮」, 「ボランティア教師の発話」の関連を明らかにすることである。その結果, 学習者の発話(あいづちが多い)が, ボランティア日本語教師の意識的配慮(会話を中断させないための配慮)を働かせ, その配慮を踏まえた上でボランティア日本語教師が発話を行う(質問や意味交渉を多くすること等)が分かった。つまり, 学習者と母語話者の言語面(言語運用)と心理面(評価と意識的配慮)には関連性があることが明らかになったといえる。

しかし、一二三 (1999) が課題として挙げている通り、母語話者としてボランティア日本語教師を被調査者にしたという問題が残されている。日本語を教えているときの意識的配慮も含まれている一二三 (1995) の質問項目を使用しているため、明らかになった配慮が、教師としてのものか、母語話者に対しては行わないものかは不明である。また、母語話者の評価と意識的配慮の関連性については扱われていない。

非教師である母語話者と学習者が実際に行っている会話を扱っている研究には、矢作 (2002) がある。矢作 (2002) は、フォローアップ・インタビューを参考に談話分析を行い、留学生とのチューター活動の場面における日本人学生の調整行動の解明を試みている。その結果、日本人学生は、①意味が通じる範囲での発音、文法、語彙の否定的な評価は行わないこと、②コミュニケーションを重視し、文法や発音などの誤用を訂正する意識がないこと、③留学生が分からない言語表現については、留学生の発話を支援する (説明を繰り返す、理解の確認をする、語彙を言い直す、話題のきっかけを作る、友達として普通体で話す、丁寧体で話す) などの調整行動を行っていることが分かった。

上記の①と②は、日本人評価研究の仮説と共通しており、③は日本人学生の意識的配慮といえる。しかし、矢作 (2002) は①～③をあくまでも調整行動として扱っているため、今後も実際に学習者と会話を行った母語話者が、どのような評価と意識的配慮を行うかを究明する研究が待たれる。

以上の先行研究から、以下の3点が明らかにされていないという課題があることが分かった。

- (1) 非教師の母語話者の意識的配慮
- (2) 学習者と会話する際の母語話者の意識的配慮
- (3) 学習者の発話に対する母語話者の評価と意識的配慮の関わり

そこで、日本語教育学を専攻しておらず、日本語教育の経験もない日本人大学生が、初対面の留学生と日本語で会話する際、どのような配慮を意識的に行っているかを明らかにするために調査を行った。

3. 調査の概要

3.1. 調査目的

調査では、インタビューにより母語話者の意識的配慮の内容を収集し、その全体像を把握する。また先行研究との比較を通してその特徴を探る。さらに、学習者の発話に対する母語話者の評価と意識的配慮がどの

ように関わっているかを考察する。

3.2. 調査期日

2002年6月5日～8月30日

3.3. 被調査者

日本人大学生30名。全員女性で、年齢は20歳から32歳。日本語教師の経験がなく、日本語教育学以外を専攻している。

3.4. 手続き

まず、日本人大学生に初対面の留学生と10分程度の自由会話をしてもらった。自由会話の内容は、自己紹介、好きな食べ物、趣味、日本での生活などを予め提示したが、その他の話をしてもいいと伝えた。

留学生は被調査者と同数の30名 (中国人19名、韓国人7名、アメリカ人2名、ニュージーランド人1名、インド人1名) で、全員女性、年齢は22歳から35歳、日本語学習時間は1年～20年である。

自由会話の直後、日本人大学生に会話の感想と留学生の日本語に対する印象を自由に語ってもらった。次に、学習者との会話の最中に、日本人同士での会話ではしないような注意や気遣いをしたか、それはどのような注意や気遣いか、どうしてそのような注意や気遣いをしたかについて自由に語ってもらった。

また、インタビュー調査の事前 (2002年4月8日～4月25日) に、母語話者が、身近な留学生と日本語で会話するとき、どのような配慮を行っていると考えているかを明らかにするために意識調査を行った。上記の被調査者とは異なる日本人学生25名に、特定の留学生を想定してもらい、その留学生と自由会話、議論、重要な連絡をする時にする注意や気遣いを自由記述してもらった (資料1参照)。

3.5. 分析方法

日本人大学生のコメントはすべて録音して文字化した。コメントは全てカード化し、一二三 (1995) を参考に内容的な分類を行った。事前に行った意識調査は、考察の際に参考にした。

4. 結果と考察

4.1. 母語話者の意識的配慮

インタビュー調査で得られた母語話者の意識的配慮を表1にまとめた。

表1. 日本人大学生の意識的配慮

意識的配慮	コメント数 (%)
(1) ゆっくり話す。	23 (25)
(2) 使用する言葉に注意する。	20 (22)
(3) ジェスチャー, 図, 絵を使う。	8 (8)
(4) いい雰囲気を作ろうとする。	8 (8)
(5) あいづちを多くする。	7 (7)
(6) 会話のイニシアティブをとる。	6 (7)
(7) 理解の確認をする。	6 (6)
(8) 特に配慮しない。	5 (5)
(9) 会話の話題に注意する。	4 (4)
(10) 学習者の国の文化を知ろうとする。	4 (4)
(11) 文法に気をつける。	3 (3)
(12) 大きくはっきりした声で話す。	2 (2)
合計	96

表1中の(2), (4), (7), (8), (9), (11)については, 具体的にどのように配慮するかという様々なコメントが得られた(以下, コメントを「」で記述する)。

- (2) 「難しい言葉(漢字熟語, 専門用語)を避けて, 簡単な言葉を使うようにする」
「方言, 略語, 流行語を使わないようにする」
「(学習者に)なじみのない固有名詞や地名は説明するようにする」
- (4) 「自然に堅苦しくないように話す」
「笑顔を心がける」
「相手(学習者)の日本語を褒める」
「話を聞いていると安心してもらいたいから目を見て話す」
- (7) 「聞き取れたか, 分かってくれたか確認する」
「言いよんでいたら, 自分(日本語母語者)から何々ということ, と言い換えて確認する」
- (8) 「上手いので特に気にしない」
「雑談(自由会話)だから多少変な日本語や言いたいことが分からなくても流す」
「会話の最中で困らなかったのだから, 意識しなかった」
- (9) 「年齢とかプライベートな話題は避ける」
「ローカル過ぎる話題は避ける」
「難しい話題は避ける」
- (11) 「間違った日本語を話さないようにする」
「必ず主語を入れる」
「普通の語順にする」
「です・ますで正しく話す」

本調査で, 比較的多くの記述が得られたのは表1中の(1)ゆっくり話す, (2)使用する言葉に注意するで, 総

コメント数の半分程度(約47%)を占めていた。母語話者が学習者と会話をする際は, 主に(1)ゆっくり話す, (2)使用する言葉に注意するという配慮が多く行われていることが分かった。

また, 表1の意識的配慮は, 矢作(2002)が指摘した, 学習者との会話における母語話者の調整行動(説明を繰り返す, 理解の確認をする, 語彙を言い直す, 話題のきっかけを作る, 友達として普通体で話す, 丁寧体で話す)と類似していることが分かった。同様に一二三(1995, 42)の結果とも類似しており, 特に, 発話内容を対話者に理解させるための言語面・話題面での意識的配慮(語彙・文法・スピードなどの言語的調節をする, はっきり正しく発音する, 流行語・俗語などはなるべく使わない, わからないときは適宜絵や文字を書く, 相手が知っていそうな話題を選ぶ, 相手が理解しているか注意する, 自分の方から積極的に話し掛ける)と共通している点が多い。桑原他(1989, 165)とも同様の共通点が見られ, 発話内容を対話者に理解させることを目的とした表現規則(言葉遣いが適切である, 適切なリズムで話す)と類似していた。

しかし, 一二三(1995), 桑原他(1989, 165)では指摘されていた, 母語話者同士の会話において行う可能性の高い配慮(具体的に話す, 聞き役になろうと努める, 独自の意見を言う, 納得いくまで話し合う)や, 教師特有の配慮(学習者の誤用を訂正する, 学習を援助する)はあらわれなかった。

以上の点から, 今回の調査で得られた意識的配慮は, 非教師である母語話者が会話の際に実際に意識して行った配慮であり, 母語話者同士の会話でも行うような配慮はあえて言及されなかったことが伺える。本調査で得られたコメントは11種類で, 一二三(1995)の53種類, 桑原他(1989)の51種類に比べると非常に少なかった。しかし, 学習者に対する母語話者の配慮は, 日本語教師の配慮や母語話者同士の配慮より少ないのではなく, 母語話者が話す日本語によって学習者が理解できなくなることを回避するために, (1)ゆっくり話す, (2)使用する言葉に注意する配慮を行う点に焦点化されているといえる。

4.2. 母語話者の意識的配慮と評価

次に, 以上のような意識的配慮が, 学習者の発話に対する母語話者の評価とどのように関わっているかを考察する。

まず, 学習者の日本語に対する評価には, 学習者の発話や会話そのものが影響していることを示唆するコメントが多く得られた。

「意思疎通が出来ていたから、上手いと思った」
 「お互いのやりとりがスムーズだったので驚いた」
 「説明が分かりやすかった」
 「楽しそうにしていたのでいい印象を受けた」
 「(学習者が) あいづちが自然に使えてて、違和感がなかった」
 「流暢だった」
 「難しい言葉や敬語が使えるのですごいと思った」
 「聞いたことのない日本語を使っていて、ちょっと不自然だと思った」
 「時々、言っている意味がよく分からなかった」
 「文法が正しくなかったけど、意味はなんとか分かった」
 「発音が不自然なところがあって気持ち悪かった」

以上のコメントは、日本人評価研究で指摘されている母語話者が評価の対象とする要因（発音、文法、語彙、流暢さ、非言語的要素、語用論的能力、待遇表現）と一致していた。

また、表1と意識調査の結果（資料1参照）が類似していることから、学習者と会話するときの配慮は、母語話者の信念と関わっていることが分かった。意識調査においても、(1)ゆっくり話す、(2)使用する言葉に注意する配慮が多く行われており、会話を行った学習者の日本語を評価してから行うというより、会話をすすめる際に母語話者が初めから意識して行っていたことが伺える。

「留学生だから、日本人と話す時よりゆっくり話す」
 「とにかく、ゆっくり話そうと最初から心がけた」
 「基本はゆっくり話すこと。(母語話者が) 英語で会話するときもしてもらいたいし」
 「方言は分からないと思うから使わない」
 「流行の言葉とかは外国人には難しい言葉かなと思った」
 「ファミレスとか略語は使わないようにしようと思っただけで使ってしまった」

(4)いい雰囲気を作ろうとする配慮、(5)あいづちを多くする配慮、(9)会話の話題に注意する配慮、(10)学習者の国の文化を知ろうとする配慮、(11)文法に気をつける配慮にも同様の傾向が見られた。

「外国人と話すことが分かってたから、日本人と話すときよりもこやかにするようにした」
 「(学習者が) 言っていることが分かっているよとアピールした方が、相手が話しやすいと思う」
 「まずは相手の国を知りたいと思うから」

「日本語の勉強のために、きちんとした語順で話した」

さらに、会話を進めていく中で、母語話者は、学習者の日本語が上手いと評価すると、それまで意識的に配慮しようと思っていたことを配慮しなくなるということが分かった。この傾向は、(1)ゆっくり話す配慮、(2)使用する言葉に注意する配慮、(6)会話のイニシアティブをとる配慮で見られた。(8)特に配慮を行わない場合は、学習者の日本語が上手いことや、会話の最中に困らなかったことや、会話が雑談であったことが原因であることも分かった。

「はじめはゆっくり話そうと思っていたけど、(学習者の) 日本語が上手かったから、途中で気にしなくなった」

「簡単そうな言葉を捜しながら話すようにしてたけど、(学習者が) 結構難しい言葉（ベストセラー作家）を知ってるから気にしなくていいかなと思った」

「向こう(学習者)からも、どんどん質問してきて普通の会話っぽかったから、気にしなくなった」
 「ゼミでの発表や改まった場での会話ではなく、雑談だから、深く考えず話した」

逆に、母語話者が学習者の日本語に問題があると評価して、意識的に配慮するという事も示唆された。(7)理解の確認をする配慮に関しては、母語話者が発話した内容を学習者が理解していない場合や、学習者が発話した内容が理解しにくい場合に行われている。

「(学習者の) 反応が鈍かったので、分かる？と聞いた」

「(母語話者が) 難しい言葉を使ったときは、(学習者が) 分かっているかを気にする。言葉に出して聞かないかもしれないけど、雰囲気を見たり、(学習者の) 顔を見たりする」

「(学習者の) 話に出てくる人が、だれで、何をしたら分からないときに、確認した」

「(学習者が言った) からしおいが何のことか分からなかったから確認した」

(3)ジェスチャー、図、絵を使う配慮と(12)大きくはっきりした声で話す配慮も、会話の最中に学習者が理解できない語彙があることに対処するために行われていることが分かった。

「ピザの生地が分かってなかったから、紙に絵を描いた」

「ジェスチャーをして、なんとか分かってもらった」

「(学習者が) 分かってなかったので聞きにくいのかと思って大きい声で話した」

「普段(日本人同士で)会話するときは、ぼそぼそ話すタイプだけど、今回(学習者と話すとき)は、はっきりと話すようにした」

一方で、以上のような学習者の発話や会話の印象だけでなく、母語話者が行った意識的配慮が、学習者の日本語に対する評価に影響を及ぼす可能性もある。(8)意識的配慮を行わなくてもよいことが、プラスの評価につながることを示唆するコメントがみられた。

「特に気を使わなくてよかったから、上手いと思った」
「日本人と話すときと比べて、特別違うことには気をつけなくてよかった。それもすごい日本語が上手ってことですよね」

逆に、(6)会話のイニシアティブをとる配慮と(7)理解の確認をする配慮をすることは、マイナスの評価につながる可能性がある。

「常に、こっち(母語話者)が何とかしないって気を使ったから、まだ(学習者は)日本語を勉強しないとイケない」

「(学習者は) 分からない言葉がいくつかあったみたいで、分かっているかどうか気にするのは、結構気を使った」

つまり、母語話者が意識的配慮を行うと評価は下がり、意識的配慮を行わないと評価は上がり、また、評価が上がれば意識的配慮を行わず、評価が下がれば意識的配慮を行わないという、意識的配慮と評価のシーソーのような関連性があるといえよう(表2参照)。

表2. 日本人大学生の意識的配慮と評価

意識的配慮*	評価への影響
	学習者の発話 → プラス評価 マイナス評価
(1)(2)(4)(5) (9)(10)(11)	意識的配慮に対する信念 → 意識的配慮あり
(1)(2)(6)(8)	プラス評価 → 意識的配慮なし
(3)(7)(12)	マイナス評価 → 意識的配慮あり
(8)	意識的配慮なし → プラス評価
(6)(7)	意識的配慮あり → マイナス評価

* 表1の(1)~(12)に対応する。

日本人評価研究においては、母語話者による評価を変化させる要因として、タスクの種類、学習者のレベルが指摘されていたが、本調査の結果から、母語話者の意識的配慮という要因も母語話者の評価に影響を与えることが示唆された。

5. まとめと今後の課題

本調査の結果から、仮説として以下の4点が提示できる。

- (1) 母語話者は、学習者と会話をしている時に、様々な配慮を意識的に行っており、主に「ゆっくり話す」、「使用する言葉に注意する」という配慮をしながら学習者と会話する傾向がある。
- (2) 母語話者は、学習者と会話をする際に、前もって必要であると考えている意識的配慮があり、学習者の発話や会話の印象にかかわらず、意識的に配慮をして会話を行う。
- (3) 母語話者は、学習者の発話や会話の状況によって意識的配慮を変化させている。
- (4) 学習者の発話や、会話の印象だけでなく、母語話者が意識的配慮をしたかどうか母語話者の評価に関わる。

以上の結果から、日本人大学生に限られているという課題があるものの、母語話者の意識的配慮の全体像と、石崎(2000)が示唆したように母語話者の評価と意識的配慮に関連があることが明らかになった。今後の日本人評価研究では、どのような学習者の言語運用が、母語話者のプラス評価やマイナス評価に結びつくか、そして、その評価がどのような意識的配慮を促し、母語話者の評価や発話に影響していくかを明らかにする必要があるだろう。もし、一二三(1999)から予測できるような、相互交渉やあいづちが、学習者のレベルや知識量に対する評価を下げ(マイナス評価)、母語話者の意識的配慮を促すという関連性が解明されれば、学習者と母語話者との接触場面で起きる問題を軽減でき、学習者のニーズや生活環境によってシラバスや教室活動を改善する事が出来ると考える。

今後は、本研究で得られた仮説を検証する調査を行い、学習者に対する母語話者の意識的配慮、評価、両者の関係に関わる心理的な潜在因子が、母語話者日本語教師と非教師の母語話者とで異なるかどうかを明らかにする。

【注】

- 1) 母語話者による評価とは、非教師である母語話者が行うものであるため、学習過程とリンクした効果測定（＝狭義の評価）に限定されたものではなく、「話をしてとても楽しかった」、「何を言いたいのかわからなかった」という反応、印象、感想（＝広義の評価）のレベルまでも含んだものと定義されている（小林，2000）。
- 2) 本研究では、意識的配慮を留学生と会話をする時に母語話者が意識して行う注意や気遣いと定義する。

【参考文献】

- 猪狩哲郎（1999）「外国人の発音に対する母語話者の要求水準について」『平成11年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会，pp.131-136.
- 石崎晶子（2000）「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」『第2言語としての日本語の習得研究』第3号，pp.19-35.
- 浦光博・桑原尚史・西田公昭（1986）「対人的相互作用における会話の質的分析」『実験社会心理学研究』第26巻 第1号，pp.35-46.
- 桑原尚史・西田公昭・浦光博・榎野潤（1989）「社会的文脈における会話処理過程の検討」『心理学研究』第60巻 第3号，pp.163-169.
- 小池真理（1998）「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般母語話者のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」『北海道大学留学生センター紀要』第2号，pp.138-155.
- 河野俊之・松崎寛（1998）「一般母語話者と日本語教師の音声評価の差異」『日本語教育方法研究会誌』5-1，pp.32-33.
- 小林ミナ（2000）「「何を」教えるかの再吟味—母語話者評価研究の意義と限界—」『北海道大学留学生センター紀要』第4号，pp.149-159.
- 坂本正・小塚操・架谷真知子・児崎秋江・稲葉みどり・原田知恵子（1990）「日本語のフォリナー・トークに対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69号，pp.121-146.
- 原田明子（2001）「日本語レベルが異なる学習者の言語行動に対し母語話者による評価に違いが見られるか」『群馬大学留学生センター論集』第1号，pp.51-59.
- 一二三朋子（1995）「母国語話者と非母語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』第43巻，pp.40-49.
- 一二三朋子（1999）「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合—」『教育心理学研究』第47巻，pp.490-500.
- 深尾百合子（1996）「工学部専門教官による留学生の会話能力評価」『平成8年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.238-243.
- 村上千おり（1997）「母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』7，pp.137-155.
- 矢作千春（2002）「チューター場面における言語管理—チューターの管理プロセスを中心に—」『社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』第38集，千葉大学大学院，pp.57-69.
- 柳町智治（2000）「日本語学習者のジェスチャーが母語話者による評価に与える影響」『北海道大学留学生センター紀要』第4号，pp.102-114.

資料1. 意識調査：日本人大学生の意識的配慮

意識的配慮	コメント数 (%)
(1) ゆっくり話す。	13 (33)
(2) 使用する言葉に注意する。	15 (30)
(3) ジェスチャー，図，絵を使う。	2 (5)
(4) いい雰囲気を作ろうとする。	2 (5)
(5) あいづちを多くする。	2 (5)
(6) 会話のイニシアティブをとる。	1 (2)
(7) 理解の確認をする。	2 (5)
(8) 特に配慮しない。	3 (7)
(9) 会話の話題に注意する。	1 (2)
(10) 学習者の国の文化を知ろうとする。	1 (2)
(11) 文法に気をつける。	1 (2)
(12) 大きくはっきりした声で話す。	1 (2)
合計	44

(主任指導教官 縫部義憲)